

## 「家族の世話をする子ども」に無料のヘルパー派遣

ヤングケアラーSOS

# 全国初の制度はどのようにして決まったのか

**家**族の世話をする子どもである「ヤングケアラー」のいる家庭に、無料のヘルパー派遣支援「ヤングケアラーSOS」を迅速に打ち出した高崎市。「高崎市の子どもは高崎市で守る」と宣言し、仕組みとネーミングを考案した富岡賢治市長に、その思いと取り組みへの覚悟をお聞きします。



取材協力 ▶ 富岡 賢治氏 ● 群馬県高崎市市長

とみおかけんじ  
文部省（現・文部科学省）に入省。官房人事課長、官房審議官、官房総務審議官を経て、生涯学習局長に就任。平成12年6月に退官し、国立教育研究所所長に。13年国立教育政策研究所に移行、同年7月退任。15～22年群馬県立女子大学学長を務める。23年高崎市市長に初当選。

### 「このままでは国は施策を打ち出せない」

——1年以上も前から話題になっているヤングケアラー問題ですが、なぜ富岡市長は、在宅で介護する家族が一番必要としている支援をすぐに提供できたのでしょうか。

高崎市の未来を見据えたとき、まずは年若い人たちへの施策を考えるわけですが、中でも、本人の責に帰すべきことがないのに、ハンデを抱えてしまっている若者や子どもを救っていくのは大事なことです。

私は、常日頃からそういう課題を探しているのですが、あるときふとヤングケアラーと呼ばれている子どもたちがいることを思い出してね。「市としてやれることはないか？」と、福祉と教育の両方の部局の担当者に、他の自治体の施策を調べてもらったんです。ところが、どこの自治体からも、「そもそも、ヤングケアラーの定義が難しい」とか、「どういう支援をしたら良いのかがはっきりしない」などの答えしか返ってこない。それを聞いて、ちょっとムカッとしましてね、「何が定義だ！ じゃあ、国は何しているんだ？」と調べてもらおうと、ちょうどその頃、厚生労働省と文部科学省が共同で調査<sup>\*1</sup>をしていたんですよ。

ただ、この調査のアンケートが、ヤングケアラーの実態を把握する全国調査というにはお粗末でね。「家族の面倒をみる時間がどれぐらいありますか」と聞いても、昔のような貧

困に喘いでいる農家で幼い女の子が子守をやらされているイメージと、今のお母さんが忙しいときに上の子に弟や妹の保育園のお迎えを頼む場合との区別はできませんよ。記述式にしてもおそらく正確には表現できないでしょう。そもそもヤングケアラーの探し方から議論していたらきりがありません。こんな回りくどいことをしていたら国はいつまでも施策は打ち出せない。それなら高崎市でやれることはやっぴいこうと思ったんです。

——高崎市では小中学生に1人に1台配られたタブレット端末を使って調査<sup>\*2</sup>をされたと聞きましたが、それが2021年7月で、もう8月13日にはヘルパー派遣のニュースが出ました。

調査の結果は使わないからね。国の調査結果もふわっとした情報にはなるけれど、実態の把握ができないし。高崎市内のヤングケアラーの人数を聞かれたら、私は市内の学校を通して行った独自の調査の結果をお答えしていますよ。でも、数字を使った議論から始めるのは、たぶんうまくいきません。数字は問題ではないので。

### 「介護者支援で必要なのはヘルパー派遣」

——予想通り、結局、国は未だにそこで止まっています。



ヤングケアラー支援なら、やれることははっきりしています。ヤングケアラーが生まれる背景には、祖父母や父母に介護が必要だったり、障害などを持つきょうだいの世話をしなければならぬなど、さまざまな事情がありますが、共通するのは困難の原因はその子にはないのに過剰な負担がかかっていて、勉強したり遊んだりする時間がなくなっていること。ならば、その子が背負ってしまった重荷を少しずつでも軽減させて支える必要がある。「本人の負担を軽減させること」を第一に考えれば、それは福祉的な施策ですよ。そもそも大人の介護者を助ける人がいないから、子どもが介護を担っているわけで、そこを救うならヘルパー派遣です。

でも、たとえば子どもが介護をしていて勉強の時間が取れずに学力が上がりなかつたからといって、本人の学力を上げることを市が考える必要はない。その子が、子どもとして普通に過ごせる時間を持てたときに、その時間をどう使うかは個人の個性の問題。そこまで面倒をみる必要はないんです。

——介護はひとりひとり違うので、要介護者に合わせた対応は難しくても、介護する人の負担を軽減させるためのヘルパー派遣ならば、非常にシンプルです。なぜ他の自治体はそれができないのでしょうか。

志の問題じゃないですか。「理不尽な目にあっている子どもたち」を支えていこうというガッツとか志が強ければ、多少難しくてもやっていけますよ。他の市長よりも気持ちが強かったということですよ。

担当者レベルでならそういう考えの人はいっぱいいますが、実現させるには手間暇がかかって途中で止まっちゃう。でも、首長が思えばできないことじゃない。ヤングケアラー支援は国や県が反対するタイプの話じゃないでしょう？

でもね、これは国や県からの支援があろうがなかろうが、そんなことは大した問題じゃない。箱モノを作るために10～20億円もかかるという話ではないでしょ？ お金がかかけられるなら、うんとかけた方がいいけれど、それも程度問題。常識的にできる範囲でやっていただけなんです。

——それでも他では進んでいません。

一番の理由はお金がかかるから。ヤングケアラーの負担の軽減は、これまでの社会では親族や親戚な近所の方が手伝うという古典的な方法でこなしてきたわけですが、その方々に頼れなくなったときにお願いするのは心優しいボラン

## 無料でヘルパーを派遣して子どもを救う「ヤングケアラーSOS」とは？

高崎市が全国にさきがけて創設した制度で、家族の介護や世話を日常的に行っている生徒に直接支援を提供し、負担を軽減して救済する。支援内容はヤングケアラーのいる家庭に週に2日、1日2時間を上限として、ヘルパー派遣を無料で行う。

対象は市内在住の中学・高校生で、窓口は教育委員会。

「支援内容からすれば、本来なら福祉部が担当するのですが、子どもの情報が入りやすい教育部に窓口を設けることで支援対象をみつけやすくしています」（教育部学校教育課）というように、学校が媒介となり、保護者、生徒が学校に申し出るほか、学校の担任等が校長に申し出て、それを受けた学校が市教育委員会に申請する。

支援開始に向けては、「ヤングケアラー支援推進委員会」が設置された。「学校からの聞き取りを丁寧に行った上で支援を開始し、その後は社会福祉部障害福祉課、こども救援センター、市のスクールソーシャルワーカーと連携をする中で、足りないものを補って進めていくことになります」（同上）。

ティアでした。とてもありがたいことですが、自分の時間が空いているときに来てくれるだけです。日本ではボランティアは無料という感覚ですが、報酬を支払っていかねば制度としては長続きしません。

来年4月に始まる「ヤングケアラーSOS」のヘルパー派遣は、1回2時間、週2回が上限。仮に1時間のお手伝いを1,000円でお願ひすると、1日2時間×週2回×500人分で100万円、1カ月で800万円です。しかもそれは人件費のみ。高崎市では来年度に1億円の予算をつけましたが、一般的なイメージとしては、たかがお手伝いに多額のお金をかけるといことで、このようなソフトに対する予算は、施策としての優先順位は低く、それをよとする首長が少ないということです。

でもね、首長がその気になりさえすればできない数字じゃないんです。予算書をひっくり返して隅から隅まで見ればやりようはある。基本的には志の問題だと思えますよ。

## 「システムを整えれば予算は抑えられる」

——ヤングケアラーなんて掘り起こしたら、「さらに介護に予算を奪われる」などの文句が出ることはないですか。

システムをきちんと整えていけば心配はないんです。

福祉は国や地方自治体の財政で相当なウエイトを占めるので、新しく制度を作ると「またお金がかかる！」という第一の反応がありますが、自治体や行政にとって福祉は切れない

いもの。やらなきゃいけないことはやるしかない。

予算にしても、きりがなくならない仕組みを作れば簡単で、「ヤングケアラーSOS」の支援時間も、上限を決めたら、それ以上お願いされても断る。節度のない形でやるのではなくその都度、しっかりと釘を刺していけば問題は出てきません。

福祉は一度始めると歯止めがきかなくなる面があって、それを抑えることでかなりの批判を受けることもある。でもそれを覚悟の上でスタートすれば、どうってことないと思いますよ。

## 「ヤングケアラーの発見に教師の力を借りる」

——本誌では1年前にヤングケアラー問題の有識者に支援方法について聞いたところ、「話を聞いてあげるだけでもいい」、「行政は相談窓口を作って」ということでした。

だいたいね、行政が作ったそんな窓口なんかで相談なんてしませんよ。行政側のアライバイ作りにはいいですよ、“なんかやってます”的なね。何も無いよりはいいんでしょうけど。

——「ヤングケアラーSOS」への申請は本人や家族以外に誰がするのでしょうか。

とにかく、ヤングケアラーの発見が一番難しいんです。民生委員・児童委員の方たちは、その家に要介護者がいることは知っていても、その子どもがヤングケアラー状態になっているかどうかの見極めは難しいかもしれない。隣人が電話してくることもないでしょうから、学校の先生が一番見つけやすいでしょう。

ただし今、それだけの繊細な目を教師が持っているのか、そこが多少心配ですね。昔なら生活指導の先生がいたけれど、今は働き方改革で先生も仕事が増えるのが嫌だから、生徒の家庭のことにあまり触れたくない。だけど、「このごろ宿題もやってこない」「勉強も調子悪いな」、という子どものことは気が付くはずで、その原因を探るのは教師の当然の職務。教師の役割のひとつはそういうところですよ。それが機能するかはやってみないと分かりませんが、一時的には学校の先生の力に頼って、そこからさまざまな人からの提案や申し込みができるようにしたいですね。

## 「苦しんでいる人を救うのが行政」

——高崎市では、すでに4年前から「介護SOS」\*3という仕組みを作り上げて、ヘルパー派遣だけでなく、ショートステイも格安で稼働させています。

この「介護SOS」も私が考えた仕組みです。今は日本中に、お年を召した両親の介護が原因で家庭崩壊に至って、苦しんでいる人が大勢いますから。そういう状況の人を見て、「大変だ!」と言っているだけじゃダメで、何をしたらいいかを考えれば、お手伝いするしかないんです。

「ヤングケアラーSOS」の支援も「介護SOS」の手法を使うので、結局、「介護SOS」が実証実験のようになりました。ヘルパー派遣の一番の問題は人手の確保で、「ヤングケアラーSOS」が迅速に始められたのは、「介護SOS」の実績で人手を集められる見通しがあったから。白紙のところから人材募集を始めていたら、時間はかかったでしょうね。

——「介護SOS」は介護者支援の仕組みとしてとても優れています。そして、その後開始された「子育てSOS」\*4も、どんどん拡充されていると聞きました。

ただ、「ヤングケアラーSOS」の場合は「介護SOS」よりもさらに問題が複雑ですから、他の仕組みよりも神経を使う部分があるでしょうね。申請があって話を聞いてみたら、原因は単なる親の育児放棄だったというケースだってあります。不誠実な人への支援は避けたいので、「支援推進委員会」を設置して支援の対象かどうかを判断する仕組み

### 介護離職をなくす!

# 介護SOSサービス

— 24時間電話1本でいつでも利用可能 —

高崎市では平成28年4月より、高齢者の在宅介護の支援として、家族や介護者の介護負担の軽減と、介護が原因による離職の防止を目的に、緊急時に対応した介護サービスをスタートします。

<h4>訪問サービス</h4>  <p><b>サービス内容</b> 介護や見守りが必要としている高齢者の家族や高齢者世帯において、緊急に介護の手配が必要となった際に、プロのヘルパーが即時訪問し介護サービスを提供します。 ※原則1ヶ月5回まで利用できます。</p> <p><b>利用料金</b> 1時間あたり <b>250円</b>税別</p>	<h4>宿泊サービス</h4>  <p><b>サービス内容</b> 家族や介護者が、急に介護ができなくなった場合に、短期の生活の場と食事を提供します。 ※原則1ヶ月3回まで（1回の利用は2連泊まで）利用できますが、施設状況により一部利用を制限させていただく場合があります。 ※入館時間は原則8時から20時までです。</p> <p><b>利用料金</b> 1泊2食付 <b>2,000円</b>税別 1泊2食・送迎付 <b>3,000円</b>税別</p>
---	--

2016年4月から開始された、高齢者の在宅介護支援。緊急の場合でも訪問サービスや宿泊サービスを安価で利用できる制度は、高崎市独自で全国初。高崎市は、介護や子育てに対する「辛い所に手が届く」制度が充実している。



みを作りました。でも、本当に話が全然通じない家庭もあるからね。たとえば、高級外車に乗っている家庭で給食費を払わないような親は、結局プロのクレマーです。若い女性の先生では太刀打ちできないし、行政での対応も難しい。だから、市では覚悟を持って訴訟を起こしています。現在、30勝0敗。志をしっかり持ってやっていたら良いのです。

「介護SOS」も「子育てSOS」も、みんながみんな善意の人ばかりじゃないけれど、これまでもそれをこなしてきたから、「ヤングケアラーSOS」での支援もやっていたのではと思っています。

——家庭に問題があれば、それは他の支援につながります。まずは誰かが行かないと何も発見できません。

実は今度、高崎市で新しく児童相談所を作る準備をしています。そこは、これまでのように、話が通じない親が出てきたときにすごすご帰ってくるようなところではなく、ドアは必ず開けさせて突入する。そういうガッツのある児童相談所、行動する児童相談所を作る予定です。

子どもたちへの不当な扱いに対しては、社会全体が勇気を持ってあたっていかないといけないけれど、それを個人が勇気を持って行うのは大変です。だから仕組みを作って行政がやる。それが基本ですよ。

### 「家族だけの介護は地獄のような世界だから」

——困っている子どもに想いがいくのは、富岡市長が文部科学省出身だからでしょうか。

関係ないですね。首長は常に、「誰に手を差し伸べるべきか」ということにピリピリしています。社会情勢に目を光らせている中で、「言われなき不当な重荷を背負わされている者を救う」というのは当然のこと。行政の優先順位は高いと思います。そういうことに対して、「やるぞ!」という気になるかどうかはその首長の感性や志の問題。興味がない人にとっては、まったく心が動かない話なのでね。

——市長は過去のインタビューで、「介護保険は使いにくい」とおっしゃっていました。それを知っている首長がどれぐらいいるのかと思って。

福祉は専門で扱ったことがない人からすると訳が分からない世界なんですよ。勉強するには硬いテーマだし、カチツと理解していくためには相当手間暇かかる。優先順位が高

## 注目の高崎市の福祉を一部ご紹介

「おとしよりぐるりんタクシー」……登録や予約はなしで、年齢制限もなく利用できる。決まったルートを年中無休、午前9時～午後5時まで3～40分間隔で運行、乗り降り自由の無料のタクシー。全国では高崎市のみ。

「あんしん見守りシステム」……緊急通報装置を無料で貸し出すのは全国初。安否確認センサーを設置して通報があると業者が駆けつける。装置の設置は無料、通信時の電話料金は利用者負担。

「はいかい高齢者救援システム」……認知症による徘徊行動がみられる高齢者を介護する家族などに、GPS機器を無料で貸し出す。GPSを身に着けた高齢者を早期発見する。

「介護SOS」\*3 「子育てSOS」\*4

「高齢者ごみ出しSOS」

その他、多数

い施策だけど、みんなが足並みそろえて、「やろう!」とはならない感じはあります。私も介護保険の予算書は細かいこところまでは分からないことも多いです。

それに、「家族の介護をしています」なんて話は、「お宅にはそういう方がいて大変ね」という、それこそ一杯飲んでときの雑談で終わっちゃうような話でね。だけど、介護をしている人からすれば、地獄のような世界だから。子どもがそういう不当な状態にあって、遊びも勉強もできずに、寝たきりのおじちゃんおばあちゃんや、病気のお父さんお母さんの面倒をみたりしている姿が目に見えたら、耐えられないでしょ? 助けてあげたいと思うじゃないですか。

それに対して行政として手を差し伸べるのは当然で、そう思えば1億円なんてどうってことないんです。ただ、そういうふうと思うかどうかは首長の感性や能力の問題。私はちょっと我慢できないもんだからね。

ともかく、困っている人たちは応援してあげないと。特に子どもは自分の責任じゃないから、救ってあげないとね。

\*1 令和2年12月の全国中学2年生、高校2年生を対象にした「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」

\*2 タブレット端末を使った調査……国の調査は学校数も対象も限られていたため、高崎市では独自の調査を行った。対象は抽出された学校の中学1～3年生全員、回答は1人に1台配布されているタブレットを使用、結果は困りごとの内容や傾向の把握に利用し、今後の施策の策定にも活用する。

\*3 「介護SOS」……電話1本でヘルパー2名が訪問する「訪問サービス」と、家族や介護者が急に介護ができなくなった場合に宿泊と食事を提供する「宿泊サービス」の二本立て。家族や介護者の介護負担の軽減と、介護離職の防止を目的としている。

\*4 「子育てSOS」……妊娠期や就学前児童のいる家庭に1時間250円でヘルパーを派遣する。保護者の精神的・肉体的負担の軽減を図り、子育ての自立に向け支援を目的としたサービス。